



## この十年に思うこと 図書館の研究支援を支える (和光大学総合文化研究所十年誌 : 1995-2005) (総合文化研究所の十年に思うこと)

著者	沢里 冬子
雑誌名	東西南北
巻	2006
ページ	360-361
発行年	2006-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00003372/">http://id.nii.ac.jp/1073/00003372/</a>

# この十年に思うこと 図書館の研究支援を考える

沢里冬子 和光大学附属梅根記念図書館事務長

和光大学総合文化研究所と図書館は、1994年の図書館の増築以来、2002年度に研究所が研究棟に移転するまで同じ図書館棟にあったが、図書館として研究支援という点での連携は構築できないでいたといえる。

これまでの図書館は、おもに学生に対するサービスの充実に力を注いできた。資料の収集においては学部学科構成、カリキュラムに対応した収集を積極的に進め、利用においても、貸出サービスや、図書館利用ガイダンスの充実に努めてきた。

それに比較して、資料収集やレファレンスなど教員に対する研究支援の役割を果たしているかといえば、まだまだといわざるを得ない。外国雑誌新規タイトルの購入希望の実現などは、ここ数年かなり困難な状況になっているし、海外データベースの導入についても要望が出されているが、実現できていない。(本稿執筆後、2006年度より一部の導入が予定されている。)

研究所とのかかわりでは、研究所発行資料の保存・利用提供、共同研究グループの資料購入や、文献調査等にも対応してきている。しかし研究支援を進めるために必要な情報の入手や、研究所との連携を図る機会も不十分な状況のなかで、受身の対応にとどまっている。7月9日に開催された、研究所主催2005年度公開シンポジウム、「大学における研究活動は、いま」は、図書館にとってもこのような状況を考え直すよい機会となった。

そのなかでも研究支援の一つとして進めてきたのがILL (Inter library Loan) サービスである。現在図書館では、国立情報学研究所のILLシステムを利用して文献複写や図書貸借サービスを実施している。さらに今年秋から従来利用していたBLDSC (British Library Document Supply Centre) のほか、北米、日韓のグローバルILLシステムに参加し、今まで以上に海外からの資料入手を可能とする環境を整えている。教員の資料要求に応えるために2004年度から文献複写料金の無料化を実施し、その結果、有料であった2003

年度と比較して、利用件数は約2.3倍、あわせて相互貸借の利用件数も約3.5倍となっている。

いま図書館では、津野海太郎館長のもと、大学における図書館の存在意義を高め、有用な存在となることを目指して活動を進めており、学生へ向けた「本を読もう！」活動、教員サービス、レファレンスの充実を課題として取り組んでいる。特に、研究支援の役割を果たすために何が望まれ、何ができるのかについて考え始めたところである。

もう一つ、いま図書館が取り組んでいることに「学内資料の収集」がある。これは「図書館を、学内で生産される研究資料の総合収蔵庫にしてゆく」という考えのもと、大学内で生産される研究や活動の成果を収集、保存、利用提供し、学外へも広めることを目的としており、研究支援の一つと位置づけている。後期から本格的に収集を始めることにしているが、今夏以来、研究所から過去に遡って発行資料の他、様々な活動の記録や資料の提供を受けている。

研究支援に対する今までの受身の対応から一歩踏み出して、「研究にウチの図書館は役立たない」という考えを払拭できるよう、研究支援サービスの確立に努力したい。

ただし、教員の要望に応え、研究支援サービスを充実するためには、図書館だけでは解決できない状況もある。今までおもに図書・雑誌を中心にして蔵書構築やサービスを行ってきたが、近年は視聴覚資料、電子資料への要望も強くあり、これらの実現のためには、やはり大学としての教育研究の充実に向けた方策を抜きにしては考えられない。

研究所、図書館、そして今年度データベースの提供を始めた情報センターもあわせた連携によって、研究環境の充実を図ることができればと思う。また、そのために大学としての方策にも大いに期待したいと思う。

( さわさと ふゆこ )